

第16回北海道教区仏教壮年研修大会

北海道教区仏教壮年会連盟理事長

石本 要

去る、2025(令和7)年5月11日(日)～12日(月)に北海道教区仏教壮年会連盟において「第16回北海道教区仏教壮年研修大会」が開催されました。本来であれば2022(令和4)年に開催される予定でありましたが、新型コロナウイルス感染症流行により開催の延期を余儀なくされ、前回の大会から7年ぶりの開催となりました。



この研修大会は3年に1度、仏教壮年会連盟のある組が主幹となり開催しており、今大会は北海道南西部に位置する胆振組が主幹組となり大会の企画、運営をしていただきました。大会会場は2008年にサミットが開催された洞爺湖の地において研修会を「洞爺湖文化センター」にて、宿泊会場は洞爺湖を一望できる「洞爺湖万世閣ホテルレイクサイドテラス」にて1泊2日の日程で開催。全道各地から106名の仏壮会員が参加しました。

ご講師には築地本願寺 副宗務長 木村共宏 師にご来道いただき、「これからの仏教壮年会」というテーマでご講演いただきました。



1日目の研修では研修大会に参加した仏壮寺院の中から特に活動の盛んな寺院の会長にご登壇いただき、お寺での活動や組での活動についてご発表いただき、ご講師より活動に対するご質問やご意見をいただきました。

活動内容には、境内の美化活動、研修会、レクリエーションなど多くの寺院がされている活動から始まり他に地域性やご住職のされている活動などそのお寺独自の仏壮活動の発表がありました。あるお寺の仏壮活動では夏に納涼会で焼き肉大会を開催しているそうですが、元々はそのお寺の住職がチェルノブイリ原発事故で高放射線地域に指定された地域の子どもたちの保養受け入れをきっかけに始まったことや、別のお寺では研修会を2部構成にし、前半は住職や寺族から「仏事のイロハ」など仏教に関わるお話をしていただき、後半は体験型のワークショップを取り入れ飽きない研修会を実施されているお寺もありました。それぞれ特徴的な活動がありましたが、共通していることは「楽しみながらつながる」「自主性を重んじる活動」を大切にしていることでした。また、総代会や婦人会など他の教化団体との合同の研修会や活動をしていることも共通して見られました。



2日目の研修では、1日目の発表を受けて「これからの仏教壮年会」について講義をいただきました。講師からは「広い北海道のすべての寺院に当てはまる解決策を提示するのは難しいが、処方箋になるような話をしたい」と多方面からのご提案をいただきました。前職でコンサルティング業務をされていた経験から、データを元に若者と宗教の関わり方や、お寺と門徒の関係性について教えていただきました。特に興味深かったのは、「若者と宗教」について若者の間で流行っている事から「信仰心そのものが失われたわけではなく、求められているのは【縛られない居場所】や【多様なつながり】である」と言うことと、お寺と門徒の関係性について、今までは「強いつながり」によりお寺が維持されてきたが、これからの時代は「ゆるいつながり」を増やし、所属型から接続型に変わってきていることを教えていただき、「これからの仏教壮年会」を考える上で重要になってくるのではないかと感じました。

2日間の研修を通して参加された会員の皆様にも気づきが多くあったのではないかと思います。参加された寺院の中には、1日目の活動発表を聞いて、懇親会が終わってすぐ壮年会員が集まり、自分たちのお寺では何ができるのか「これからの仏教壮年会」について話し合いが行われたそうです。

次回の研修大会は2028（令和10）年に上川南組が主幹となって開催する予定となっております。今回の研修会で聞いたことを実践し、次回の大会ではより多くの壮年会員の方が参加していただけるように邁進して行きたいと思います。